

エレミヤ書

預言者エレミヤは南のユダ王国の最後の数十年間
エルサレムにいたイスラエルの祭司です
彼は偶像礼拝と不正によって神との契約を破ったイスラエルに
厳しい裁きが下ると警告するため 預言者として召されました
そしてこの裁きをもたらすために バビロン帝国が神のしもべとして
用いられエルサレムを壊滅させ 人々を捕囚として連れていくだろう
と預言しました 悲しいことにその預言通りになりました
エレミヤは包囲されやがて陥落したエルサレムを生き延び
人々が連れ去られるのをその目で見たのです

この書はとても興味深い成り立ち をしています
36 章にはエレミヤがエルサレム で 20 年間説教したあと
神が彼にその説教や詩や文書を まとめるように命じ
そこでエレミヤはバルクという 書記を雇いました
バルクはこれらをまとめ巻物に 書き留めました
またバルクはエレミヤ自身に関する ことも書き集め
それをまとめました エレミヤ書は彼を神の正義と恵み
を伝える預言者として描いています

この書は神がエレミヤを預言者として任命 するところから始まります
彼には 2 つの召しが与えられました
イスラエルに対してそして
他の国々に対して預言すること でした
エレミヤの言葉は 引き抜き壊し建てまた植えるため
でした つまり彼は神の裁きが来ると警告
し責めたのですが 将来の希望についてのメッセージ
も語ったのです

この冒頭の言葉は最初の大きな
セクション 1 章から 24 章を見事に要約しています
これらはバビロン捕囚以前のエレミヤの著述を集めたもので
内容はイスラエルが神との契約 を破ったこと
そしてトラーすべてに違反した ということです
具体的にはこういうことです イスラエルはカナンのあらゆる

偶像礼拝を取り入れ その宮を国中に建てました
エレミヤはその偶像礼拝を不倫 にたとえ娼婦乱交不貞
といった言葉を使いながら イスラエルが偶像の神々にいかに
入れ込んだかをなじりました エレミヤはまた墮落した祭司たち
王たち 他の預言者たちを糾弾しました
彼らがトーラーと契約を踏みにじ ったため
社会には不正がはびこっていました トーラーにある戒めが守られない
ために社会の弱者である未亡人 孤児移民たちが虐げられていた
のに イスラエルの指導者たちは気に
も留めなかったのです これらのことについてまとめた
有名な箇所が7章にあり エレミヤの神殿説教と呼ばれて
います

イスラエル人はあたかも何も問題
がないかのように 神殿で礼拝していましたが
神殿の外で偶像を礼拝していた のです
中には子どもをいけにえにする という
カナン人の恐ろしい儀式を取り 入れている者さえいました
そこでエレミヤはイスラエルの 神の裁きが下るとい
う人々を不快にさせる預言をしました

神は北からの敵を送りご自身の宮
を破壊し イスラエルを罰するというのです
神がこの敵にエルサレムを征服 させたのです
読み進んでいくと その敵とはバビロン帝国である
ことがわかります これらはすべて 25章へとつなが
っていきます イスラエルは神に立ち返りませんでした
そこでバビロンの新しい王ネブカドネ ツアルの元年に
神はエレミヤにバビロン軍がやって 来て
イスラエルと近隣諸国を征服し その民を 70年の間
捕囚にすると告げよと命じました

彼はバビロンを
イスラエルの不正と偶像礼拝に対する 神の義なる怒りで
縁まで満たされたぶどう酒の盃 にたとえました
そして 神はイスラエルと近隣諸国にその

盃から飲ませると言ったのです この章は重要な鍵となりますという
のも この後に続く記事はすべて
バビロンの襲来に焦点が当てられている からです

まず 26 章から 45 章でイスラエルが 襲撃され
次に 46 章から 51 章で近隣諸国が襲 われます
イスラエルについてのセクション ではまず
エレミヤがイスラエルに神に立ち 返るよう
最後の瞬間まで懇願したにもか かわらず
指導者たちが彼を拒絶し続けた ことが語られます
そしてこのセクションの最後は バビロンに包囲されたエルサレム
の様子と陥落した時の様子 そしてその期間迫害されていた
エレミヤが 最後はイスラエルの反逆者によって
エジプトに連れ去られたことが 書かれています
しかしこの災いと裁きの暗い話 の真ただ中で
エレミヤはイスラエルの将来について の希望を語ってもいるのです
かつてモーセが申命記 30 章で預言 したように
神との契約を破ったイスラエル は追い散らされても
神はご自分の民をお見捨てにはな らずそれどころか
契約を新たにしイスラエルの心 を造り変える
とエレミヤも語っています

エレミヤはさらに神はいつの日
か トーラーの戒めを石の板にではな
くご自身の民の心に刻み 彼らの背きの罪から癒やし
真心から神を愛して従うことが できるようにすると語りました
そしていつの日かイスラエルは エルサレムに帰り
ダビデの家系からメシアが現れる と言ったのです
その時にはすべての国々が イスラエルの神こそ真の神である
と悟ります つまりこれらの章はイスラエル
の背きの罪にもかかわらず 神は彼らを見捨てないことを教えて
います むしろ神はご自身の誠実さのゆえに
何が起ころうと約束を実現させる のです

この後には 神がバビロンを用いてイスラエル
の近隣諸国であるエジプト ペリシテモアブエドムアンモン

ダマスコ ハツオルを裁くという詩がたくさん
続きます しかし驚いたことに最後に来る
いちばん長い詩は 神がバビロンをも裁くという内容
なのです 神は裁きを下すためにこの国を
用いましたが だからと言ってこの国の暴力や
偶像礼拝を良しとしていたわけ では
ありませんでしたですから バビロンも神の正義によって裁
かれるのです エレミヤはこの国のおごりと不正
についても糾弾しました バビロンは詩の中で身の丈を超
えた国として描かれ このことは創世記 11 章にあるバビロン
を思い出させます バビロンは反逆する国の典型と
なったのです 富と戦争を愛するこの国を神は
自滅させようとしていました

この書は

第二列王記の最後に書かれている 出来事をもって終わっています
そこにはバビロンがエルサレム への最終攻撃で
その城壁を破壊し神殿を焼き払い 人々を捕囚にしたことが書かれて
います

つまり

エレミヤが 1 章から 24 章で警告して きたことが現実となったのです
けれどもこの章は 捕囚にされたイスラエルの王である
エホヤキンについての短い記述 で終わっています
彼はダビデの子孫でした バビロンの王は彼を牢から出し
その後死ぬまでずっと王の食卓 につかせました
それがこの書のエンディングです ここにかすかな望みがあり
30 章から 33 章にあるエレミヤの希望 の言葉を思い出させます
神はご自身の民をお見捨てにならず ダビデの家系からメシアなる王
が出るという約束も反故にされません というわけでこの書には多くの警告
と裁きが記されていますが その締めくくりは未来への希望
となっているのです これがエレミヤ書です

500字要約

エレミヤ書はイスラエルの預言者であるエレミヤが、イスラエルの偶像崇拜と不正行為に対する神の警告を伝え、バビロンの侵攻とエルサレムの破壊を予言しました。この書はバビロン捕囚前のイスラエルの不義と墮落を詳しく述べ、神が預言を成就させた後、エレミヤの希望と神の約束を示す部分が含まれています。彼は神の裁きと希望を伝える預言者としての役割を果たし、特にバビロン捕囚とそれに伴う出来事を的確に予言しました。また、エレミヤの著作をまとめた巻物をバルクに書かせ、神との契約を再確認し、将来の希望を語りました。この書は警告と裁きの中にも未来への希望を持ち、エレミヤの預言と神の約束が最終的に成就することを示しています。